

1 70歳代男性、ストーマ造設を受け入れることができない

患者の心理状態

○千田 美歩（赤穂市民病院）

I. はじめに

本患者（以下A氏と略す）は直腸癌にて人工肛門（以下ストーマと略す）を造設した男性の患者である。A氏は、入院時よりストーマを受け入れることができず、術後のストーマ管理指導が円滑に進まなかった。研究者は、A氏がストーマの受容を困難にしている原因を探究することを明らかにしていった。

II. 研究方法

対象は70歳代前半、男性、直腸がんにてマイルス術施行。術前から術後25日目（退院）までのA氏の発言内容を面接法を用いて分析した。倫理的配慮として患者が特定されないようにイニシャルなどを用いる。また、得られた情報は研究終了時シュレッターなどにかける。

III. 結果

1. 衝撃の段階（術前から術後3日目頃）

術前より主治医から直腸癌にてマイルス術をおこなう予定であると説明がある。しかし、A氏にとって初めての入院・手術であるための不安と術後の自分が想像できない不安があった。術直後は疼痛などによりA氏の安楽が保たれておらずストーマに興味を示すことができなかった。

2. 承認の段階（術後4日目から術後12日目頃）

術後、状態が安定し離床も進んだ。看護師がストーマ観察をするたびにA氏からストーマに対する質問や実際に触る行為がみられた。徐々にストーマに興味を示し始めた。

3. 防衛的退行の段階（術後13日目から術後15日目頃）

ストーマパック交換の指導に入る。座位になり、ストーマパック交換をしていると、腰痛が起りパック交換を拒否するようになった。また、腹部から排便があることに対して嫌悪感を訴えていた。次第に拒否することが多くなり、看護師・A氏の妻がパック交換するようになる。

4. 承認の段階（術後16日目から退院まで）

A氏の意向とストーマの状態から、パックの種類を変更する。腰痛も徐々に軽減してきており、また腰痛がありながらも自分のペースで交換することを身につけ徐々にパック交換ができるようになる。また、退院後A氏はストーマからの排便状況を観察するなどストーマに興味をもってケアできるようになっている。

V. 考察

A氏は初めての入院・手術・ストーマという未知なものに対する不安があった。また、腰痛による身体的苦痛が、A氏にとって精神的にも苦痛となった。そのため今後ストーマ管理をしながら生活することが脅威となりストーマの受容を困難にしていたと考えることができた。